

血小板凝集能を有する *Helicobacter pylori* 膜蛋白を利用した *H. pylori* 関連疾患検査法の開発

高知大学医学部附属病院検査部 森本徳仁



臨床検査医学会 平成 26・27 年度学術推進プロジェクト研究にご採択頂き誠にありがとうございました。これまで *Helicobacter pylori* 感染により発症する免疫性血小板減少性紫斑病 (*H. pylori* 関連 ITP) の発症メカニズムの解析を行なっており、今回、その研究内容を高く評価していただいたことを心より御礼申し上げます。

ITP の多くは原因不明なものが多く、脾臓における網内系細胞での血小板破壊の亢進を抑制するために摘脾や免疫抑制剤投与による治療が行われています。特に免疫抑制剤による治療は、つねに副作用を考慮する必要があり、患者にとっても大きな負担となっています。1998 年に、イタリアの Gasbarini らにより *H. pylori* 関連 ITP が報告されて以降、ITP 患者の一部で *H. pylori* 除菌を行うことにより、血小板数が回復した症例がヨーロッパやアジア等で多数報告されています。このことから、平成 22 年には ITP の治療法として、*H. pylori* の除菌療法が正式に保険適用となっており、ITP の原因の一つとして *H. pylori* が重要な病原因子と位置づけられるようになりました。*H. pylori* 関連 ITP における血小板減少メカニズムの一つとして、*H. pylori* 感染により産生される抗体の直接的な関与が考えられていましたが、この現象だけでは臨床経過を説明できないことから、*H. pylori* の抗原（タンパク質）および抗体が血小板減少に関与しているものと仮定して検討を行ってきました。その結果、*H. pylori* の膜タンパクの一つが血小板に直接結合し、さらに膜タンパクに対する抗体が結合した免疫複合体が血小板減少に関与する可能性を見出しました。

現在のところ、尿素呼気試験、内視鏡学的に採取した組織からの *H. pylori* の培養検査および血清中抗体価の測定等、*H. pylori* 感染をサポートする検査法は多く導入されていますが、*H. pylori* 関連 ITP に関する直接的な検査法は今のところ存在しません。そこで、患者への検査・治療に対する負担軽減および特異性の高い *H. pylori* 関連 ITP の診断に利用できる検査として、本菌膜タンパクを用いた検査法（ELISA 法）の開発を試みたいと考えていた矢先、幸いにも日本臨床検査医学会の学術推進

プロジェクトに採択して頂き研究を進める事ができました。検討結果から、*H. pylori* 膜タンパクを用いた ELISA 法において、*H. pylori* 関連 ITP 患者は非 *H. pylori* 関連 ITP 患者より血清中の *H. pylori* 膜蛋白に対する抗体が高値を示す傾向が認められ、さらに血小板関連 IgG (PA-IgG)を組み合わせることにより、*H. pylori* 関連 ITP 診断としてさらに有用な検査になる可能性が示唆されました。

臨床検査技師として検査業務を行いながらの研究活動でしたので、研究費および臨床検査医学会からサポートを頂いたことは、研究を実施する上で大変な支えとなりました。今後も学術推進プロジェクトをご継続頂き、臨床検査医学領域における研究活動のサポートをしていただければ大変ありがたく存じます。この度は本当にありがとうございました。